



TITLE:

『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』のチェス

AUTHOR(S):

ミューリ, 真貴子

CITATION:

ミューリ, 真貴子. 『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』のチェス.
Zephyr 2019, 31: 21-37

ISSUE DATE:

2019-06-10

URL:

<https://doi.org/10.14989/242872>

RIGHT:

『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』のチェス

ミューリ真貴子

序

ウラジミール・ナボコフ (Vladimir Nabokov) の『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』(*The Real Life of Sebastian Knight*) の先行研究はウラジミール・E・アレクサンドロフ (Vladimir E. Alexandrov) が論じる異世界をテーマにしたものや、マイケル・ウッド (Michael Wood) の “real” に焦点を合わせたものがある。近年、ジェラルド・デ・ヴリース (Gerard De Vries) はチェスと絡めた分析を行い、本小説の冒頭に登場する O-O-O という頭韻を “The letters forming the ‘egg-like alliteration’ in the name of Olga Olegovna Orlova, [”]O-O-O, is the chess notation for castling at the queen’s side” (187) と述べる。1942 年、ジェイムズ・ロフリン (James Laughlin) に宛てた書簡の中で、ナボコフは “Bunny Wilson¹ has a very cute but absolutely erroneous theory that ‘Sebastian’ is composed on the lines of a chess-game” (*Selected Letters* 40) と語る。また、本小説が出版された段階ではウィルソンは絶賛していたとされるが、アレックス・ビーム (Alex Beam) は、1964 年には “Feud” が生じていたと論じている (151)。

一方、若島正は、他作品ではあるが『ディフェンス』(*The Defense*) 1999 年版の解説において「『ディフェンス』を一局のチェスの棋譜として見たときに、その指し手の一手一手に解説というかコメントを付けてみたい誘惑にわたしは駆られる」(272)と証言する。また、秋草俊一郎は、論文「謎解きナボコフ『ディフェンス』—モラルをめぐるゲーム」のなかで「重要なのは、表面的なチェスのアナロジーをこじつけることではなく(そういう意味でチェスの知識は必要とされない)、構成面でチェスやチェス・プロブレムに発想が似ている、ということだ。そういった意味で、この小説はきわめて特殊な『チェス小説』なのだ」(86-87)と説く。更に、レオナ・トーカー (Leona Toker) は『ディフェンス』に関し、チェスは小説の心理的な機微とその構成の複雑さから読者の意識をそらしてしまうと警告する。

¹ エドモンド・ウィルソン (Edmund Wilson) を指す。

チェスのモチーフを作品から抽出し、作品全体をチェスのゲームに見立てて論じることは、行き過ぎたアナロジーの探求となり、無益なことかも知れない。だが、『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』の小説世界を概観すると、明らかなように、チェスのモチーフが無作為に配置されているとは言い難く、単なるシンボルとして、通り過ぎることなどできるだろうか。

そこで、本小説をチェスの棋譜と見なし、登場人物をその駒に準え、全体を紐解く試みを、幾分かは有益であると判断してもよいと考える。これより、チェスのモチーフを炙り出し、自伝的小説『記憶よ、語れ』(*Speak, Memory*)を手掛かりに、全体の仕組みを棋譜であるかの如く解き明かす試みを行う。

大筋は、信用できない語り手“V.”が、異母兄弟である Sebastian の真実とされる人生を辿る物語となっているようである。死後、元秘書の Mr. Goodman が Sebastian の伝記を発表した。だが、内容が不正確であったと捉え、腹違いの弟 V. (語り手) が正確と言えそうな伝記を書くために立ち上がる。まるで、探偵のように Sebastian が通った大学やゆかりの地、交友関係を探る。だが、その表面的なストーリーの展開と並行し、チェスのモチーフが要所に嵌め込まれ、棋譜を思わせる場面が見受けられる。本稿では棋譜であるかのような展開に焦点を当てる。

I

本小説におけるチェスのモチーフの重要性について考えてみると、題名に Knight が使用され、まるでチェスとの関係を宣言しているかのようである。その上、Sebastian は黒い表紙の練習帳に書いた自作の詩に Knight と署名する代わりに、黒インクでチェスの Knight の駒を描く。すなわち、“Knight” には名前としての Knight と、チェスの駒としての Knight の両方の意味が含まれているのだ。少年時代、Sebastian はその練習帳を母の思い出の詰まったすみれの砂糖漬け等と共に鍵をかけ、引き出しにしまっていた。次の箇所は V. が鍵を見つけ、引き出しを開け、その練習帳をのぞき見る場面である。

I dimly recollect the verse was very romantic, full of dark roses and stars and the call of the sea; but one detail stands out perfectly plain in my

memory: the signature under each poem was a little black chess-knight drawn in ink.² (15)

“perfectly plain” という記述が直前にあるため、“black chess-knight drawn in ink” の表現が際立ち、重要であることが強調されている。Knight は名前、もしくは「単なるチェスの駒」のみならず、署名の役割さえ担う。ここは、チェスというものが小説世界において、どれだけ重要なものであるかということが端的に表され、本作品とチェスとの強い絆のようなものを証明する判断材料の一つと言えよう。

Sebastian の実母 Virginia Knight の描写には “with a small quivering face under a huge black hat” (8) とあるように、Sebastian と同じ黒のイメージを持たされる等、似た点が多く、次のところはそのヒントとなる。

Virginia reappeared in 1908. She was an inveterate traveller, always on the move and alike at home in any small pension or expensive hotel, home only meaning to her the comfort of constant change; from her, Sebastian inherited that strange, almost romantic, passion for sleeping-cars and Great European Express Trains, [...] (7-8)

このように、小説世界において、Virginia は盤上の駒の動きと見まがうように、移動する。Sebastian とは親子であることから、繋がりが強く、小説における動き方も類似している。“from her, Sebastian inherited” で明らかのようにその性質は遺伝しているのだ。例えば、Virginia は “always on the move” と表現され、と同時に、Sebastian もサンクトペテルブルクから、ロンドン、ケンブリッジと転々とする。その上、二人とも心臓の病気でこの世を去る。また Sebastian は父方の苗字を名乗らず、母方の苗字 Knight を名乗るため、Knight が二つ揃うことになる。つまり、Two Knights Defense³ と考えられる。

チェス盤も小説世界に存在する。Sebastian が最期を迎えた場所は St.

² 以下、『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』からの引用は Vintage 版による。

³ チェスのオープニングで打つ手の一つである。

Damier⁴ (130) にある St. Damier 病院である。小説の最終段階はここで繰り広げられ、アンドリュー・コールトン (Andrew Caulton) は “St. Damier, is explicitly associated with a chessboard” (130) と論じる。小説のエンドゲームもチェス盤上で行われるのだ。

また、Sebastian が夭逝した 1936 年は単なる年号として、通り過ぎることはできない。このことを確認するために、『記憶よ、語れ』に出てくる次の記述を見てみよう。

A severe illness (pneumonia, with fever up to 41° centigrade), in the beginning of 1907, mysteriously abolished the rather monstrous gift of numbers that had made of me a child prodigy during a few months (today I cannot multiply 13 by 17 without pencil and paper; I can add them up, though, in a trice, the teeth of the three fitting in neatly); but the butterflies survived. My mother accumulated a library and a museum around my bed, and the longing to describe a new species completely replaced that of discovering a new prime number. (*Speak, Memory* 123)

ナボコフは “3” という数字について、単なる数字以上の意味を持たせ、“the teeth of the three” と表す。つまり、読み手は、視覚的にその数字の形状をも注意深く見ることも要求されているのではないだろうか。更に、『記憶よ、語れ』によれば新しい素数を発見したいという願望も作家は抱いていた。1936 の “936” を観察してみると、936 は 3 という素数を中心とするならば、9 と 6 は点対称で移動した場合、完全に重なり合う。また、936 という並び方から、9 が元になったもの、6 は回転後の位置ととれる（逆も同様である）。同じくチェス盤も中心を対称点とし、びたりと対称となっているため、この相似点はチェスとの関係を示すようである。次の引用は、1936 年に関する言及であり、点対称について考えるヒントとなる。

He died in the very beginning of 1936, and as I look at this figure I cannot help thinking that there is an occult resemblance between a man and the date of his death. Sebastian Knight d. 1936 . . . This date to me seems the reflection of that name in a pool of rippling water. (181)

⁴ フランス語でチェス盤の意である。

このように、語り手 V. は、“an occult resemblance” と表現し、Sebastian と早世した年との間には神秘的な類似性が本当に存在する気がしてならないと言う。ナボコフが『記憶よ、語れ』で言及していたように、単なる数字であるというだけで見過ごしてはならないと警告するかのようだ。936 という並びは 9 と 6 を羽と見なすと、羽を広げた蝶のようにも見える。Sebastian の主治医の Dr. Starov の電話番号は “Jasmin 61-93” (194) (1936 を配置変えたかのようなものである) であり、ケンブリッジでの部屋番号は 6、住所は 36 を含み、死亡年齢は 36 歳であることから 6 という数字は、何らかの意図、または特別な意が込められていると考え得る。それはチェスの駒の種類の数の “6” ではないだろうか。また、6 は Knight と密接な繋がりがある。それは冒頭で述べたチェスのオープニングで見受けられる Two Knights Defense において、Knight の位置は c6 と f6 なのである。Knight の動きは特徴的なため、チェス盤上での位置には法則性がある。それは二桝進んで左右のどちらかに移動し、L 字型である。このため、d6 の位置は考えにくいのであるが、上記の引用において、date, death, d, date とあるように、あたかも間違った桝に位置していることを警告するかのよう、d を連呼している。しかも、死んだのは “the very beginning” であるため、小説をチェスの棋譜と見立てると、小説の冒頭とチェスのオープニングがあたかも重なり合うかのよう、類比して考えられないだろうか。

語り手 V. が憧れる(表向きは)フランス人とされる Madame Lecerf は黒いドレスを身に纏い、黒の煙草入れを携え、執拗に黒のイメージを持つ。Lecerf には鍵という意味のフランス語 clef が含まれ、この小説世界の鍵となる情報を把握しているかのようである。次に引用するのは、最後に起こることをあたかも知っていたかのような彼女の台詞が皮肉に響く場面である。

Madame Lecerf was silent; then she said: “You must have been very fond of your half-brother, if you make such a fuss about his past. How did he die? Suicide?”

“Oh, no,” I said, “he suffered from heart-disease.”

“I thought you said he had shot himself. That would have been so much

more romantic. I'll be disappointed in your book if it all ends in bed.”
(167-168)

まさかここで結末を告げることなどしないであろうという読み手の憶測の先を行くかのような発言であると同時に、Lecerf が、Sebastian に関する何らかの鍵(clef)を握っていたことは確かのようなのである。

チェスの試合において序盤から活躍する Bishop は作中、同じ様に前半で活躍する。Bishop の駒は盤上、初期配置において、c の場所に位置する。このため、ナボコフは Clare の頭文字と重なるように、そのように Clare の名前を詠えた。また、Clare は元々 Sebastian の秘書であった。V. がカフェで Clare と Sebastian を見かけた時、二人は “the girl sitting opposite him” (69) と座っていたが、角度を変え、この情景を眺めてみると、並んでいるようにも見える。あたかも、盤上、隣り合わせになる Knight と Bishop のように、秘書として Bishop は Sebastian の傍にいたようであった。だが、Clare は、後に苗字が同じである Mr. Bishop と結婚し、Mrs. Bishop となる。つまり、Bishop と Bishop の婚姻により、Bishop が二つ並ぶ。このため Double Bishop、もしくは Bishop Pair のようだ。また、Mr. Bishop も、Clare Bishop と同じく “a huge man in a black dressing-gown” (75) と黒のイメージを持つ。Clare は Sebastian との別離の後、風邪を拗らせ、最後には出産が原因で死ぬ。言わば小説世界から抹殺される運命となっている。すなわち、盤上から消える。彼女の役割は「捨て駒」だ⁵。

Rook は、チェスの試合において、終盤、力を発揮することに倣ったかのように、Nina Toorovetz⁶は後半、活躍する。富士川義之が「ニーナがセバスチャンの母親の生まれ変わりであることは、いかにもナボコフらしい文学的遊戯なのだが、二人の名前の中に隠されているのではなからうか。すなわちニーナ(Nina)はヴァージニア(Virginia)の一種の字謎になっているのではあるまいか」(72)と述べる。確かに、その綴りは、Sebastian の母 Virginia からその一部を受け継いだようである。つまり、Nina には母の

⁵ 将棋の捨て駒は再度、使用できるが、チェスの捨て駒は二度と戻らない。

⁶ ロシア語で Rook の意を指す。前半は Madame Lecerf を演ずる。1974 年出版『見てごらん道化師を！』(Look at the Harlequins!)には Nina Lecerf なる人物が登場する。

面影のようなものが投影されているのだ。また、ナボコフの短編「フィアルタの春」(“Spring in Fialta”)には同名の Nina が登場する。Sebastian の母は晩年、“Les Violettes” (17)、つまり、「すみれ荘」(28)で暮らしていた。このため、すみれは母のイメージを含む。鱗翅類学者としてのナボコフを鑑みると、ある種の蝶の幼虫の食草であるすみれは、幼虫にとって、正しく“母”なる植物なのである。また、Virginia はすみれの砂糖漬けを Sebastian に渡す。その関係はまるで、すみれと幼虫の関係のようである。

フランス語の女性名詞である Les Violettes には名詞につく縮小辞がついており、小さなすみれの集まりという印象がある。「すみれ荘」は本当に単なる建物であったのであろうか。蝶が好むすみれの集まりだったのではないだろうかと思わせるナボコフの効果的なフランス語の使用と考えられる。すみれは重要なモチーフとして、他作品にも登場する。「フィアルタの春」の Nina も最期、“a firm bouquet of small, dark, unselfishly smelling violets” (429) とあるように、小さなすみれ(フィアルカ)の花束を持ち、死を迎える。Virginia と二人の Nina は作品を超え、繋がっていると考えられる。中田晶子は “The Nina of Fialta (Nina F) seems to have been reincarnated in Nina Rechnoy (Nina R), alias Mme. Lecerf” (13) と説く。遮る駒さえなければ前後左右に自由に移動できる Rook の動きさながらである。次の引用はエンドゲームでの Nina の姿である。

They move round Sebastian—round me who am acting Sebastian, —and the old conjuror waits in the wings with his hidden rabbit; and Nina sits on a table in the brightest corner of the stage, with a wineglass of fuchsin water, under a painted palm. (203)

“stage” は、小説における舞台のことであるにもかかわらず、あたかもチェス盤を舞台と思わせるような表現と考えられる。なぜなら、チェスの駒は英語で “chessman” であるため、チェスの駒には “man”、つまり、“人”のメタファーが含まれている。このため、舞台に “man” があがることとチェス盤に “chessman” があがることが類比して見えないだろうか。同様に、チェス盤は英語で “chessboard” であり、“board” という語の持つイメージの一つである「あがる」の意は舞台のような少し高いところへ「あがる」こと

を想起させるようである。また、*Oxford English Dictionary* によれば、“board” には “The stage of a theatre” の意がある。“board” という語の歴史について考えると、“board” は「舞台」の意で使われていた時代もあった。ゆえにチェス盤は本小説にとって、単なるシンボルの意のみならず、小説における舞台装置となっていると思えないだろうか。その上で、その “stage” の最も輝く位置にいる Nina はまるで、チェスの試合の「勝ち」、もしくは本小説の終演を宣言しているかのようである。

Pawn 役は初めから終わりまで登場し、その出番の多さからも明らかにように、V. と考え得る。Pawn は弱小な立場でありそうながらも、「成る」ことによって、変身、大活躍し、王手をかけることも可能である。ゆえに、終始、単なる語り手と見せかけておきながら、最後には Queen ではなく、Knight になる瞬間を水面下で狙っていたと考えられる。通例の Queen にはならず、Knight になるという捻りは、V. が Sebastian になるという展開と Pawn が Knight になるという展開が一致するように構成されており、二重写しとなっている。このように物語の構図がチェスの棋譜と重なり合う時、あたかも登場人物の動きとチェスの動きが調和しはじめ、駒が描く幾何学模様が、小説世界においても浮かび上がるようである。その光景は、この小説を読む人、誰にでも同じように見えるものなのか。チェス・プロブレムについてではあるが、ナボコフが『記憶よ、語れ』で “In the case of problem composition, the event is accompanied by a mellow physical satisfaction, especially when the chessmen are beginning to enact adequately, in a penultimate rehearsal, the composer’s dream” (291) と述べる快感はチェスやチェス・プロブレムを知る者にしか分からないものなのであろうか。

II

Sebastian は自伝的小説『失われた財産』(*Lost Property*)において、13 年前に実母 Virginia が亡くなったとされる Roquebrune という場所を訪れた時のことを語る。淡い桃色の “Les Violettes” (17) で、Sebastian は母の幻と出会ったような不思議な体験をすることとなる。

Roquebrune の綴りには Roque(r)⁷が含まれている。この Roquer は、小説の冒頭で登場した O-O-O に関するデ・ヴリースの記述のように、重要な駒を安全な場所へ移動させる目的の、駒を入れ替えるテクニックである。それと同じように、『失われた財産』にある “I went for a long walk” (17) という Sebastian の行動は、チェス盤の隅へ行くことを連想させる。フランスという国の端に位置する Roquebrune へ赴くこととチェス盤の隅へ行くことが似通って見えないだろうか。チェスの試合において、大切な駒は castling の結果、チェス盤の隅へ、つまり、Rook の居た安全な場所へ移動するのである。Sebastian がたまたま見つけた Roquebrune-Cap-Martin (Alpes-Maritimes) は Sebastian の母の従兄弟の指摘によれば、従兄弟が語った Roquebrune-Sur-Argens (Var)ではない。小説世界において、Sebastian は勘違いし、同名の違う土地を訪れたという解釈がされている。だが、小説世界において、安全な Roquebrune は普遍的な場所、つまり、小説世界における「現実」の世界には存在しない、危険から守られた土地を指しているのではないだろうか。従兄弟が Var 県の Roquebrune だったと述べた時、それに対する Sebastian の返答は書かれておらず、Mr. Goodman の論評にその答えのヒントが記されている。次に引用するのはその箇所である。

It is curious to note that Mr. Goodman, quoting the same passage, is content to comment that “Sebastian Knight was so enamoured of the burlesque side of things and so incapable of caring for their serious core that he managed, without being by nature either callous or cynical, to make fun of intimate emotions, rightly held sacred by the rest of humanity.” No wonder this solemn biographer is out of tune with his hero at every point of the story. (18)

V. の語りによると、Mr. Goodman の Sebastian に関する認識は間違っていたとされる。「Sebastian は物事の滑稽な側面に大層心を奪われ、物事の重大な核心を重んじることができなかった」のではなく、その逆であり

⁷ フランス語でチェス用語の castling を指す。

Sebastian は物事の滑稽な側面に心を奪われずに、重大な核心を重んじることができたということになる。勘違いにより、同名の Roquebrune に行ってしまったという Sebastian の滑稽な失敗談のように語り手は見せかけ、実際のところは、母を守る安全な土地である Roquebrune を Sebastian は訪れていたのではないだろうか。

以上、Roquebrune に行ったかどうかについて、二つの全く逆の解釈が可能となる。従兄弟の発言を軸にすれば、従兄弟の指す Roquebrune には行っていない。母の亡霊を見たという Sebastian の霊的な体験は幻となる。物事の核心を軸にすれば、母を守る土地である Roquebrune に行ったことになる。となると、ぼんやりかすんで見えた母はやはり母であった。息子によって守られている場所にいる母である。この出来事は、『失われた財産』に記述されている。つまり、小説という虚構世界の中の、虚構世界の物語の中である。Sebastian が母の思い出の土地を訪れたという出来事は、(訪れていないかのように) 入れ替えられ、Roquebrune という土地は同名の近隣の土地により、入れ替えられ、小説内小説という形式のため、世にさらされたくない真実はすぐには到達できない場所に保管されているようである。

だが、最も隠されている事実は V. の実母のことである。語り手による “My mother says” (16) という発言は存在し、情報は小出しにされている。“his happily remarried father” (16) という記述から、再婚は幸せなものであったことや亡命時の状況が明らかにされるのみで、小説世界のどこを探してもこれ以上の詳しい情報は見当たらない。Sebastian の実母 Virginia については多くのことが記述されているにもかかわらず、語り手自身の実母についてはその名前すら、語られることはない。ゆえに、その全てが母を守る指し手、もしくは、手の内を読まれないようにする棋譜、または、応手のように見えないだろうか。

III

小説世界において、チェスの実戦が二カ所見つかる。登場人物によるこれらの場面は、そのまま、作家ナボコフの創作、プロット構成をほのめかすようである。その戦況を覗き見る限り、これらの対決は似て非なるもの

である。11 章の 1 戦目は隣室で行われ、駒の動きを窺い知ることはできない。すなわち、意図的に隠されている。チェスの試合において、初めの駒をどこへ移動するか、駒の動きにより、次の指し手が明らかになってしまう。このため駒の動きを知られない目的で、読み手には明かされない。また、11 章の試合の直前には Sebastian の著書『成功』(*Success*) (100) への言及がある。これは Chess と韻を踏んでおり、これからチェスの試合がはじまるという合図のようである。次はその P. G. Sheldon と Clare Bishop の戦いについての引用である。

“Now you’ve done it . . .” cried Sebastian, and dashed his fountain-pen at the shocked white wall. “Can’t you let me work in peace,” he shouted in such a crescendo that P. G. Sheldon who had been playing chess with Clare in the next room got up and closed the door leading to the hall, where a meek little man was waiting. (101)

試合部屋の扉は閉じられ、戦況は煙に巻かれる。所謂、先を読まれてはならないというチェスの対局の筋書き通りで、小説世界においても先読みされにくいように、詳細は煙に巻かれているのである。しかし、後半 14 章に差し掛かると、その手は部分的に公開される。次のところである。

“I could take your rook now if I wished,” said Black darkly, “but I have a much better move.”

He lifted his queen and delicately crammed it into a cluster of yellowish pawns—one of which was represented by a thimble.

Pahl Pahlich made a lightning swoop and took the queen with his bishop. Then he roared with laughter. (140-141)

約 2 ページに渡り、チェスの試合が断続的に描写される。“so-and-so” (140)、“red-and-blue” (140)、“bye-and-bye” (141) といった等位接続詞が多く使われ、あたかも二人の人物が向き合って座るイメージを連想させるような筆捌きである。しかし、チェスの試合が詳細に描写されるのではなく、Knight の頭がとれたことや Pahl Pahlich Rechnoy が Queen と Bishop を入れかえたこと、Uncle Black が勝利し、Pahl Pahlich Rechnoy が負けた

ことは明らかなものの、それ以上の情報は語られない。Rook をとるか、とられるかという戦況下、“I could take your rook now if I wished” (140) という Black の台詞は女性を巡り戦う男性の台詞のようである。最終的に Black は Rook、つまり、Nina Toorovetz (Nina Rechnoy) を得る。このことは「フィアルタの春」の小説世界において、Nina が男性にちやほやされる状況と重なる。本小説においても Nina は魅力的な女性と描かれ、捨て駒になることなく、生かされる。

Black は、駒を箱へしまおうのだが、針仕事のためであることは文脈より、類推できるものの、正確な理由は、明かされることはない。Pawn の代わりをしていた指貫だけは、箱にしまわれないのである。そして、この箇所はナボコフの作品で注意しなければならない括弧の中に記述されている。指貫は、指に被せ、指を守るもの、もしくは指に準ずるものである。すなわち、V. が Pawn であると見なすと、Pawn の代わりをしていた指貫は Pawn の身代わりのようなものだ。語り手を片付ける訳にはいかず、指貫は残されているのではないだろうか。また、語り手がそのチェスの試合の場に居合わせていたため、代わりに指貫に Pawn 役を代演してもらっていたと読める。

次の一手を考える際、指し手を読まれては試合にならないため、情報を小出しにし、こちらへ行くと見せておき、意外な手を打つのが通例である。本小説中にはこの意表をつくような物語の流れが見受けられる。それはあたかも書き手がその先を読み手に見破られないように手を変え、品を変え、筆を捌いているかのようである。この意表をつく展開は小説世界で数限りなく存在する。死亡した異母兄弟の伝記を書くのであれば、読み手は、語り手 V. は Sebastian の死に際に間に合った、または間に合えると想定するであろう。ところがその予想を覆すように会えずじまいとなる。ただ単に会えなかったのではなく、会えるのか会えないのか読み手の気持ちを扇動した挙句に会えないのである。会えたと思ったその人は Knight と頭文字が同じ K で始まる英国人らしき人物で Sebastian ではない。

Sebastian の書いた小説『プリズムの刃先』(*The Prismatic Bezel*) に登場する美術商の G. Abeson は、チェスの駒 6 種類、色違いで 12 種類であることを暗示するかのように 12 人が住む “a boarding-house” (90) の住

人である。ここでは、チェスの駒 6 種類と同数の 6 枚の血染めのハンカチが発見される。アガサ・クリスティー (Agatha Christie) の『そして誰もいなくなった』(*And Then There Were None*) に対する allusion であるが、“the ‘island’ note” (90) と強調される場所であるため、通常とは異なる空間であることが示唆される。チェスの駒と盤は、試合が始まると、単なる駒と正方形の板状の物体ではなく、特殊な空間へと変化する。“a boarding-house” (90) もまた、同じ様に探偵小説を彷彿とさせながら、他とは異質な場所という演出がなされている。つまり、チェス盤が、試合と同時に特殊な空間になるように、ここでも同様に異質な空間が生み出されていると考えられる。

Sebastian が危篤であるという電報を送ってきた Dr. Starov は、V. が電話をかけても繋がることはない。19 章に記述されている Sebastian から V. への手紙には、“Lately I have been seeing a good deal of old Dr. Starov, who treated *maman* [so Sebastian called my mother]. I met him by chance one night in the street” (183) と書かれているように、Sebastian は通りで偶然、Dr. Starov と出くわす。さも、Dr. Starov とはいつでも会えるような演出だ。しかし、V. が、Sebastian に関する重要な情報を知りたい時には連絡が取れない。以下のところである。

I went to have a shave and then ate a hurried breakfast. At twenty past five I rang up the number I had been given, and was told that the doctor had gone home and would be back in a quarter of an hour. I was too impatient to wait and dialled his home number. The female voice I already knew answered that he had just left. (195)

電話をかけても、外出中か、たった今、出かけたところであり、一向に直接話せない。最終的に、St. Damier でも会えない。すなわち、意図的に会えないように仕組まれている。実体が見えない Dr. Starov は存在したのかどうかさえない。つまり、Dr. Starov からの情報はなく、遺族が医師に説明を聴けなかったという意表をつく展開である。

St. Damier 病院で、別人を Sebastian と勘違いしているにもかかわらず、“His presence in the next room, the faint sound of breathing, gave me a

sense of security, of peace, of wonderful relaxation” (200) とあるように安堵の気持ちを V. は感じる。V. は Sebastian の死に際には、付き添えなかったが、別人には付き添った訳である。間違いとはいえ、V. は Sebastian だと信じたゆえ、前述の気持ちになった。ということは、必ずしも Sebastian でなければいけなかったのか。そうでなくともそのような気持ちになれたのなら、完全な悲劇ではないとも言える。V. は Sebastian の最期に間に合わなかったが、勘違いのもたらした、間に合ったような心地はしたということである。つまり、Roquebrune の時と同様、逆の解釈が可能となる。物理的に会えたかどうかには焦点を合わすと、会えていないため、兄弟の臨終に間に合わなかった可哀そうな弟 V. の滑稽な失敗談となる。だが、V. の心の動きに焦点を合わすと、V. がベッドに横になっている男性は Sebastian であると信じ切っていたからこそ感じた “the wave of love” (200) は別人であれ、それは本物の感情であった。それゆえ、心は「付き添えた」のである。継続的に起こる意表をつく展開、間に合ったと思いきや、別人であった。しかし、心は寄り添えた。母に会えなかったが、会えた時に感じたであろう感動は味わった。手の込んだ筋書きという名の戦略を、熟練した読み手ならば、容易に予想し、理解できるのだろうか。

ナボコフは Sebastian の部屋にもあったルイス・キャロル (Lewis Carroll) の『不思議の国のアリス』(*Alice's Adventures in Wonderland*) をロシア語に訳している。このためか、Lewis はナボコフの作品を読み解くに際し、何らかのヒントを与えてくれる人物であるようだ。本小説には Roy Carswell という Sebastian を描く画家が登場する。この名前に関し、コールトンは “The painter’s name also anagrammatically hints at Lewis Carroll (“Roy Carswell” = “Lewys Carrol”)” (185-186) と論じる。つまり、Lewis Carroll と小説世界に登場する画家 Roy Carswell は字謎である以上、何ら関係のない存在であるとは言えないであろう。なぜならば、ナボコフが小説世界を描き、語り手 V. は Sebastian の生涯を描こうとしている(はずである)。そして、Roy が Sebastian を描く第三の存在なのである。ゆえに、本小説における「解」のようなものを導く鍵の一つとなり得ると考えられないだろうか。『鏡の国のアリス』(*Through the Looking-Glass and What Alice Found There*) の Alice は白の Pawn 役で冒険を初め、終盤で Queen に昇格する。

Pawn は、最終的に立場の強い Queen に成るのが通例であるが、本小説では Queen にならない。両作品にまず Knight が現われ、Sebastian は池の水面に映る己を覗き、同じ様に、Alice は鏡に映る己を覗く。Alice は鏡を通し、虚構の世界へ渡るが、Sebastian は水面に映る己を見る。その Sebastian は、Sebastian 自身ではなく、水の反射によるものである。Roy は Sebastian を描くのだが、水面に映った Sebastian を描く。つまり、実物ではなく、虚構の Sebastian を描いていると思えなくもない。しかし、反対に、それが Sebastian の真実の姿と思えなくもないのだ。ナボコフが仕掛けた効果的に読み手を惑わせる演出なのではないだろうか。ありのままの Sebastian を描かない Roy は、まるで V. の語りようであり、情報を小出しにするどころか、情報があるのかないのかあやふやである。

小説冒頭で、ロシアの貴婦人から、“not to divulge” (3) と懇願されたが、語り手はこの女性の名を暴露することなど、予想の逆をいく記述が多くある。本来、V. は異母兄弟の伝記を書くために、旅を始め、Sebastian に関する正しい情報を入手する目的だったはずであるが、実際のところ、正しい情報は完全には入手出来ていないに等しい。全ては V. のフィルターを通し、記述され、題の“real”についても、Sebastian の真実の生涯が忠実に語られていたとは言い難い。確かに、誰かの人生を言葉によって、正確に再現することができるのかは謎である。語り手が Sebastian の伝記を書くという本筋の流れはあったのかも知れないが、正確な伝記を書き終えたかどうかは不明で、富士川は「セバスチャンの生涯で決定的な意味をもった、あるいはもったであろう重要な出来事は、すべて、きわめて断片的かつ不完全にしか書き記されていない」(66)と述べる。

結び

ナボコフは、登場人物をチェスの駒と準え、チェス盤を小説世界における舞台のように見立て、作家が計画した通りに、登場人物が動くように仕向けながら、実際に筋書き通りに、駒＝登場人物が動くのを観察していたのではないだろうか。また、ナボコフは『記憶よ、語れ』において、チェス・プロブレムの腕比べを小説と重ね合わせ、次のように述べる。

It should be understood that competition in chess problems is not really between White and Black but between the composer and the hypothetical solver (just as in a first-rate work of fiction the real clash is not between the characters but between the author and the world), so that a great part of a problem's value is due to the number of “tries”—delusive opening moves, false scents, specious lines of play, astutely and lovingly prepared to lead the would-be solver astray. (*Speak, Memory* 290)

チェス・プロブレムとチェス対決は別物である。だが、どちらも相手(解答者、または敵)がおり、「解」を求めるという点では同じである。チェス・プロブレムの価値は“the number of ‘tries’”によると記述されている。つまり、「紛れ」の多さによって決まるのであるならば、本小説は多くの“tries”に溢れているため、その価値は計り知れない。また、読み手はその巧みな技に再読する価値に気づかされることだろう。

最後まで公表されなかった真実、それは、King は誰だということである。語り手 V. は Sebastian について探索していく中で、チェス盤上に繰り広げられた小説世界において、Pawn として、あちらこちらへ移動し、最終段階まで到達し、Knight への昇格を遂げた。だが、Pawn は、ほぼ全ての駒へ変身することができるものの、ある一つの駒を除かねばならない。その駒は作中に登場せずに、隠れている。実際に、チェスの試合の際にも、その駒は、後半になってのみ、活躍するか、勝っていれば、戦う必要などない。息をひそめ、他の駒が動く様を鑑賞していた。その正体を明かすことなく、本物の King 同様に、終始、その座に鎮座していた人物、それは作家ナボコフだったと言えよう。最終段階まで、駒を動かし、最後には自らも King として役を演じるという構図で締めくくられる。だが、エンドゲームにおいても King の姿は読み手には見えない様に仕掛けられている。奇しくも、Knight の綴りには、King のアルファベットが含まれ、Knight (の綴り)に隠れ、King は密かに存在していたようである。また、Knight という語において、K は silent になっているため、発音する際、K の音は聞き取することは出来ない。通常、night と同じように音読される。つまり、K という文字は書く時にはその姿を現し、発音する時には、その姿は消えるというこ

とになる⁸。綴りに含まれながらも、常に活かされる訳ではない K は、Knight に隠れる King の K ということだったのではないだろうか。

引用文献

- Alexandrov, Vladimir E. *Nabokov's Otherworld*. Princeton UP, 1991.
- Beam, Alex. *The Feud: Vladimir Nabokov, Edmund Wilson, and the End of a Beautiful Friendship*. Pantheon Books, 2016.
- Carroll, Lewis. *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking-Glass*. Oxford UP, 2009.
- Caulton, Andrew. *The Absolute Solution: Nabokov's Response to Tyranny, 1938*. Peter Lang, 2013.
- De Vries, Gerard. *Silent Love: The Annotation and Interpretation of Nabokov's The Real Life of Sebastian Knight*. Academic Studies Press, 2016.
- Nabokov, Vladimir. *The Real Life of Sebastian Knight*. Vintage, 1992.
- . *The Stories of Vladimir Nabokov*. Vintage, 1997.
- . *Speak, Memory: An Autobiography Revisited*. Vintage, 1989.
- Nabokov, Dmitri, and Matthew J. Bruccoli, eds. *Vladimir Nabokov: Selected Letters, 1940-1977*. Harcourt Brace Jovanovich, 1989.
- Nakata, Akiko. "A Failed Reader Redeemed: 'Spring in Fialta' and *The Real Life of Sebastian Knight*." *Nabokov Studies*, vol. 11, 2007-2008: pp. 101-126. *Project MUSE*, doi.org/10.1353/nab.0.0008. Accessed 25 Feb 2019.
- Toker, Leona. *Nabokov: The Mystery of Literary Structures*. Cornell UP, 1989.
- Wood, Michael. *The Magician's Doubts: Nabokov and the Risks of Fiction*. Princeton UP, 1998.
- 秋草俊一郎. 「謎解きナボコフ『ディフェンス』—モラルをめぐるゲーム」. 『英文學研究』, 第 85 号, 2008 年, pp. 73-88.
- ナボコフ, ウラジミール. 『ディフェンス』. 若島正訳, 河出書房新社, 1999 年.
- . 『記憶よ、語れ』. 若島正訳, 作品社, 2015 年.
- 富士川義之. 『ナボコフ万華鏡』. 芳賀書店, 2001 年.

⁸ チェスでの Knight の記号は N であり、K は省略される。